慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近代化と伝統：日本に関連して
Sub Title	Modernization and tradition
Author	有賀, 喜左衛門(Ariga, Kizaemon)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1964
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.4 (1964.) ,p.1- 9
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：日本の近代化：論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000004-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代化と伝統

——日本に関連して——

Modernization and Tradition

有賀　喜左衛門

Kizaemon Ariga

1

近代化という言葉は戦後特に頻繁に用いられている。しかしその意味は一定していない。諸家の説く所をその傾向によって分類して，その是非を論ずることは大切であるが，ここでは詳論する余裕もないので，大体を見るに止めておく。

学問的な使い方でない場合に近代化という言葉の意味は特にあいまいである。例へば今の政府が党の近代化とか，農村の近代化とか云っている場合もそれである。党の近代化といっても，今の日本では，主として自民党の派閥解消のことを指しているように見える。しかし社会党はどうなのだろうか。ともかくこの場合に近代化というのは，政党が「民主主義」に向って改善されることを意味するらしい。そしてその対概念として封建的という言葉があげられ，それを派閥に結びつける含みがあるように見える。近代化という言葉には屢々こういう背景が伴っている。これに対して農村の近代化の方はどうだろうか。この場合は都市の工業労働者との収入格差を解消するために，農業経営の規模を大きくするとか，大農具を導入して，「合理的」経営をするとかの一連の施策を意味しているらしい。これにも農村は封建的で，不合理だという考え方がどこかにつきまとっているが，この二つの近代化の意味は必ずしも一致しないし，初めからこの言葉の概念をはっきりきめて使っているわけではない。日常語の中には漠然とした意味の使い方はまだ沢山ある。農業者がテレビや電気冷蔵庫などの新しい器具を使用すると，近代化したという。どんな田舎でも，これを都市化だなどともいう。こういう言葉の使い方はキャッチフレーズ的に表現する所に何となく魅力があるので，使い易いが，そのために意味はあいまいになる。

これらの現象はさておいて，日本における近代化の学説としては，大体二つ挙げたらよいのではないだろうか。

第一説は，欧米において近代（modern age）に発展した文化を模範として，それに近づくことを近代化と規定するものである。この場合には日本の伝統を否定し，それを変革することによって，欧米文化に近づくことを目標としている。ここでは世界の文化の発展は，諸国民の伝統がいかなるものでも，それを否定して，一つの方向に向って行くものとし，欧米文化の発展して来た道筋を orthodox として価値づける態度が基本となっている。前掲した日常語の近代化の使い方も，大体はこの考え方が基礎になっていると見られる。それほどこの考え方は日本においてはひろがってしまった。

第二説は欧米文化の発展を高く評価する点は第一説と変りはないし，また日本の近代化はこれにより極めて大きな影響をうけていると見る点でも同様ではあるが，この根底には日本文化の伝統があり，特殊な日本的近代化が表れていることを見て，欧米文化の発展と異なる点を鋭く見出しているものである。

第一説は世界諸国民の文化の発展を普偏的な一つの発展段階によって説明する学説に基礎があり，従来 marxist が好んで採用して来たが，非 marxist においても比較的多く見られ，明治以来の日本における欧米文化の熱情的な習得を説明するのに最も便宜であった。なぜなら，日本における明治以来の「近代化」の現象は，日本人の欧米文化に対する強いあこがれによってひき起されたのであるから，この学説を権威あるものとして受取る

のには極めて都合がよかったからである。

第二説は最近主としてアメリカの学者によって主張され，日本人の中にこれに賛成するものが次第に増加して来た。戦後急速に発展した日本の工業の中で，アメリカの学者は，日本の経営に欧米のそれと異なる特殊な性格のあることを指摘したことは誠に目新しいことであり，且つ創見に富むものであった[1]。これ以前の日本人の研究においては，工業化は欧米化であり，近代化であるという見解がほとんどすべてを占めていた。それは欧米のそれに比しておくれて発達し，且つ歪曲しているときめて，この欧米化——近代化——への道の中で，日本的に見えるものを封建的と規定し，これは日本の近代化を阻害する条件と見たのであった。だからこの見解に対し，第二説は劃期的な重要さを持つ。

これ以前に日本の学者の中でこの種の説を主張するものがなかったわけではないが，それらは主として日本の家族，村落及び都市の商業などについて日本的性格を問題にしたにすぎない。また工業の研究についても，戦後少数の人々はアメリカの学者とは別に日本的性格に注目を始めていたが，これらの研究は大工業や資本主義経済の全体像の中でそれを問題にするほどに成長していなかったので，第一説の汎濫の中で，強い説得力を持つほどの堅牢な学説を打ち立てることはできなかった。

今日外国の学者によって第二説が唱えられるに及んでも，日本における近代化は欧米化であるという考え方は依然として多いし，第二説もこの大勢の中で捉えられるという考え方もあるし，第二説をみとめながらも，それは日本においては反動的な考え方を助長するという批評すらある。

アメリカの学者 J. W. Hall は1960年に箱根において日米社会科学者28名を集めて，「近代日本に関する会議」を開催し，近代化の概念についての提案を行って注目をあびた。その内容については「思想」(1961年 1 月439号)で発表されて，一般には明かとなった。「日本の近代化——概念構成の諸問題」という論文である。彼は近代化の現象は西欧の諸社会に起源を有するが，それらはそこから世界の諸国にひろまると共に，国々による特色を帯びたことを認めている。そして近代化は西欧化と部分的に一致し得るとしても，両者を混同してはならないという極めて重要な提言をしている。そしてこの説は箱根会談に参加した日本側の学者たちにはほとんど賛成されなかったことも，彼の文章によって明らかである。これは日本において当時第一説の主張者が圧倒的に多かったということによるものである。

この会談の際彼によって提案された近代化の諸規準の一覧表は資本主義社会と共産主義社会の双方に適用され得る中立的な表現が選ばれた。しかしこれも日本人の側からは賛成を得られなかったことを，私は川島武宜の「近代化の意味」(思想 1963年11月473号) という論文の中ではっきり知った。

Hall が最初に出した提案は，この会議のあとで彼によって改訂されて前掲の論文にのっている。(思想 439号) それは次の通りである。

(1) 個人がその環境に対して，非宗教的，かつますます科学的に対応していこうとする志向の伸張を伴なう，普及した読み書き能力
(2) 人口の比較的高度の都市集中と，社会全体がますます都市を中心として組織されていくこと
(3) 無生物エネルギーの比較的高度の使用，商品の広汎な流通，およびサービス機関の発達
(4) 社会成員の広汎な空間的相互作用と，かかる成員の経済的および政治的過程への広汎な参加
(5) 広汎な，しかも浸透性(マヽ)をもったマス・コミ
(6) 政府・実業・工業の如き大規模な社会的諸施設の存在と，かかる諸施設の編成がますます官僚制的になりゆくこと
(7) もろもろの大きな人口集団がしだいにひとつの統制（国家）のもとに統一されること，および諸単位の相互作用（国際関係）がいよいよ増大すること

こういう approach の仕方に対する反対があるべきことを川島武宜は彼の論文の中で指摘している。その第一としては「東」または「西」の政治的立場に立って社会科学の問題を考へている人々を挙げている。川島のこの指摘を私から見れば，もし社会科学を自己の政治的立場でとりあげるとすれば，反対の政治的立場の説に対してはもちろん，そのどちらの立場にもつかない提案をも拒否しようとするのは当然であろう。しかし今日の社会科学は，それが科学である限りは，いく分でも共通の広場を求めようとしないのであろうか。Hall の提言は，彼がアメリカ人であっても，近代化の概念に共通の広場を見出し得ないだろうかという切なる希望を表明したものと見ることができる。

川島の予想した Hall に対する第二の反論は，「近代化

(1) J. C. Abegglen, The Japanese Factory, Aspects of its Social Organization, 1958. 占部都美訳「日本の経営」ダイアモンド社，1958.
S. B. Levine, The Industrial Relation in Postwar Japan, 1958. 藤林敬三，川田寿共訳「日本の労使関係」ダイアモンド社，1959.

という一つの言葉で，種々の異質多様な変化を包括することは，歴史学上分別されることを要する種々のものの区別を抹殺するか，或はあいまいにすることとなり，今日まで歴史学が構築して来た理論を無意味ならしめる」と主張することであった。この川島の説に対して，私はHall を弁護するのではないが，Hall は彼の論文において，近代化は諸国民の文化の上で多種多様に生じていると明言していることに注意してほしい。さらに彼はその当然の帰結として，近代化と西欧化とを混同してはならないという鋭い指摘をしているのである。これに比べれば，日本の marxist や非 marxist たちの多くは，世界文化の発展をただ一筋の発展段階に当てはめようとした。この見方は多様な諸民族・諸国民の文化のあり方をかえって単純化するものであると私は見ているので，Hall の考え方が単純だというのは当らないと思っている。だからこのような意味では，Hall の approach に批判を加えようと私は思ってはいない。

Hall は上掲の近代化現象の一覧表を出す前に，もっと具体的な表現の内容を提示していたことは彼の論文で知られるが，それをもっと平易な我々の日常用語におきかえて見ると，近代科学，合理主義，個人主義，ヒューマニズム，教育制度，民主主義，産業化(工業化)，マス・コミ，都市化，議会制度，官僚制等々の近代社会において生じて来た諸現象が挙げられる。Hall が慎重に科学的に処理しようとしたのは，これらの現象について，自由主義国家群と共産主義国家群との間に見解上の差異があることを懸念したからである。このことは外見的には同様に見える（あるいは，同じ言葉で表現される）現象でも，諸国民の間に内容の違いがあることを見ていたからである。今日両陣営にとって，共通な，大きな方向づけが生じているという現実を見逃がさないために，近代化という問題提起を敢て行なおうとしたのだと私には思われる。だから彼の近代化の概念の不備について，どのような批判をしても良いと思うが，もし我々がこの問題提起の真意を見失うとしたら，否は我々の側にあるといわねばならない。

そこで元に戻って，私は Hall の一覧表の stereo 版を淡白に羅列したが，それらの現象を近代化の意味を持つものとして挙げるだけなら容易であるし，これらの現象が現在から未来に向って世界のすべての国々において発展して行くことを予想することも困難ではない。しかし近代化とはこれだけの意味であるなら，それは 16C 以来西欧において生じた新しい文化の発展に追随するという意味でしかない。日本の多くの人々がこの考え方を受け容れるとしても，U.S.A. やソ連の人々がこれを是認するわけはないし，Hall の見解もまたそうでなかったことは明らかである。

2

近代化という日本語が，もし modernization の翻訳であるなら，modernization とは何を意味するのかを知らねばならない。しかるに欧米においても，この言葉の概念がきまっていないことは，Hall の論文を見てもわかる。もちろん彼の解釈がないのではないが。

日本の場合には，前掲の二つの学説によるとすれば，それは西欧文明に根源があり，それを何らかの意味で学ぶことを近代化の意味としている。所が日本語の用法において，近代とは必ずしも欧米とは同じ意味を持っていない。例へば日本史における時代区分は西洋史とちがっている。すなわち，中世（前期封建制＝鎌倉・室町時代），近世（後期封建制＝江戸時代），近代（明治～昭和戦前），現代（昭和戦後）という区分である。括弧内の註釈は異論百出であるが，括弧外の名称は多分に共通している。この場合の近代は西洋史の近代(modern age) と同じではないが，この名称を工夫した人は内容的に類似するものを見ようとしたのかも知れない。例へば封建性の克服の時代として西洋の「近代」と同じ意味を持たせようとしたかも知れない。しかしそれにしては近代の言葉を使用している日本の歴史家の多くはこの期間に日本社会に余りに多くの封建性をみとめており，現代において近代化をみとめているので，日本史の近代を西洋史の「近代」と対応して命名したのかどうか疑わしくもなる。このことを次のような角度から見ることもできる。それは日本の明治以後を西洋の「近代」に真似て近代と命名しても，日本史の近代は西洋史のそれと異なる点が多いということを自ずから見せていることである。

西洋史の modern age とは西欧における 16C 以来の時代的展開をさしているが，英語の modern とは何であろうか。現代の概念を示す言葉としては contemporary という言葉があるといわれているが，Oxford の辞書によれば，この言葉は person belonging to the same time という使い方をしているので，現在という概念ではない。これに対して modern は of the present & recent time と註釈されている。modern には時の巾があって，現在から近い過去まで含めていいことは明かであるが，近代 (recent time) は現在を根拠として成立するという極めてあたり前の考え方のあることを示し

ているから，現在の自覚によって modern という概念が成立することがわかる。

modern age を日本語に訳する場合に近代とも現代とも表はすことができるが，これを日本史の時代区分の名称と混同することはできない。翻訳の場合に，日本では近代と現代とに使いわけているが，これを英語の modern と contemporary に対応させるのも誤りである。

modernization という言葉にきまった概念はまだないのだから，日本で普通用いられるように近代化の意味にとってもよいわけである，つまり中世的な（例へば封建的な）現象から近代的な（例へば民主主義的な）現象に変化させることをさしてもよい。日本ではこの場合ただ近代的な現象に変ることをさすのでなく，西洋の近代的現象をモデルにするという特定の意味が含まれている。これは日本の立場において，このように考へることが必要であったということであって，一般に modernization が westernization であるといってよいかどうかは問題外である。例へば今日の U. S. A. やソ連はそのはじめには西欧を学ぶことの多かったことをみとめても，今日は逆に大きな影響を西欧に与へていると自信している。そこではアメリカ化とかソ連化という現象すら考えられるのが現実である。

だから日本で使用している近代化という言葉も粗雑な使い方であり，その内容として用いられている westernization，西洋化，欧米化，西欧化という言葉もよく考えるとあいまいな使い方であることがわかる。

しかし私はこれらの言葉の使用に何でもかでも反対しようというのではない。こういう言葉の使用の仕方に日本の現在の姿が浮び出しているからである。しかしこういう事実だけを modernization と見てよいのかどうかというのが私の持つ大きな疑問である。これだけでは肝心な芯が抜けているように思われるからである。

明治の初めに，日本が西洋文化の受け入れにふみ切ったのは，その時の世界史の条件に照らして，日本を強国に仕上げようとする切実な自覚を持ったからである。ただ漫然として西洋文化を受け入れたのではない。modernization は屢々 westernization として規定されているが，これを西洋化 (westernization) という言葉だけで了解してよいのだろうか。明治以来の西洋文化の輸入によって，日本は西洋化したと云い得るだろうか。また将来西洋化ができるのだろうか。日本は明治の初期に目標とした理想を，ある程度は其後実現した。しかしその時西洋化が理想であったか十分には明らかではないが，西洋のように強い国になるという理想はあった。だからこの意味で西洋は絶えずモデルとして考えられたが，この経過の間に西洋とちがった強国になるという理想も国民の間で語られていたことも事実であった。それでもその方法として西洋文明の輸入は歓迎された。

西洋文明の輸入によって種々の面での発展が生じた。それらは外観的には全然同じように見えるものも少くはなかったが，内面的に見ると西洋化というには余りにちがったものであった。このことを日本人自身が表明している。例えば日本資本主義は西洋のそれの歪曲された特殊なものだという議論もその一つである。歪曲されたものだというのは悪い模倣であるという意味であろう。日本が西洋の資本主義を真似したというのなら，それを模倣と意義ずけるのは決定的である。西洋各国の資本主義にしてもみな条件はちがっていた。日本ではイギリスのそれを orthodox の形を持つということが好んで云われたが，西洋の他の諸国ではそういうことを考えなかった。特に U. S. A. ではそんな考え方はない。皆それぞれの国の条件の中で資本主義は発展し，複雑に関連し合った。日本の資本主義もその例外ではなく，日本の条件を踏まえて成立し，発展しなければならなかった。

資本主義のように，それまでの日本になかった文化でも，それを受入れて（模倣して），成立させようとすると，やはり日本の政治的条件や社会的条件を踏まえて出発しなければならなかった。こういうことは単に明治以降の西洋文明の受入れの場合にのみ生じたことではなかったが，ともかくこの受入れを西洋化 (westernization) とよんでよいか疑問がある。何となれば西洋と同じものができなかったというばかりでなく，気持の上では「模倣」でも，結果的にはそれとはずれていたので，要するに大分ちがったものができ上って来た。これを「歪曲」とか，「悪い模倣」と評価するのは，西洋文明の規準における評価であったことはまちがいない。あるいは西洋文明を自分の頭の中でもっと理想化して見たその規準から見た評価であったかも知れない。

しかし現実には西洋と同じものができるはずはなかったのであるから，この「模倣」と見られた現象は実はそれ以外に進む道がなかった唯一の結果であった。もちろんそこに来るまでに，いくつかの試みがあり，誤ちもあったであろうが，その中から日本人が選んだ唯一の道であったことになる。だから日本の条件の中では，それが創造への道であったと見ることができるので，単純に模倣と見るべきではない。westernization という言葉が用いられている場合に，模倣から創造への展開の意味としては考えられていないが，それでよいのだろうか。

日本人は古い時代から外国文明を驚くほど受入れて来て，今日もなお飽きることを知らない。こういうことを日本の伝統と見ることができるとすれば，伝統すら固定したものと見ることは困難であるが，この状況の中で，日本に特殊な文化を豊富に創り出して来たことも歴史上明らかである。日本の近代と現代とにおいて，西洋文明の激しい輸入が行われたのは，日本人がこの時代の世界史の中で生き抜くには，「近代」の西洋文明を受け入れることが大切だという強い自覚から来たのであるから，近代化ということに強い意味を持たせ，しかもそれに一定の内容を与へたのであった。

この場合に，日本の近代化の内容は，西洋諸国が近代に辿った道と同様のものと考えようとするが，日本人の近代から現代に掲げた近代化の目標はそんな悠長なものではなかった。西洋が約400年もかかって来た過程を一時に実現しようという性急なものなのであった。日本人は明治維新以来の約90年間に自分たちが為し遂げた成果をさへ否定し，それを飛び超えて一挙にして西洋の水準に到達しようという激しい気持であった。そんなことは後進国には到底できないとは考えなかった。marxist は marxist で，非 marxist は非 marxist で，自分の理想を最上としてまっしぐらに進もうとした。権威ありとみとめた西洋の諸思想や社会制度を現実以上に理想化して，それに比較することによって，日本の在来文化も，新たに作り上げたものをも否定して，第一流国家の座につきたいとひたすら念願した。それができないとわかった瞬間に激しい劣等感に落ちた。外国の理想的映像を描くことは，一面に漫性的劣等感をも誘発したが，それでもそれを乗り超えようと努力し，絶えずあせり，背伸びし，またこれによる進歩も生じた。

西洋近代の歴史は我々日本人に多くの教訓を与へているが，彼らの辿った道と同じように日本人がその道を辿ることはできなかったし，またそれと同じ tempo を日本人は自分自身に許そうとはしなかった。なぜなら，それは近代から現代への時点——それぞれの現在——に我々日本人が抱いていた切実な問題意識によって生きるしか道はなかったからである。だから我々日本人は我々の現在に特有な意味で modernization を解釈しようとしていたのである。

このように見た所で，特定の国の，特定の時代の，特殊な意味における modernization しか私がみとめないというのではない。「日本の現在の近代化」という場合に特殊な意味を持つことは当然であるが，modernization とは世界史の中で初めて成立する現象だと私は思う。すなはち世界的な文化交流はいつの時代の人間にとっても，最も重要な問題であって，どの時代の，どこの国の人間もその中で生活し，次第に発展することができた。そして各時代の世界文化にはその中心となる国民と文化とがあり，その文化は他の国民に絶えず影響を与えた。その中心はもちろん移動したが，この現象の中に各時代の現在における modernization の意識が生じていたと考えるのである。これは世界史的関連という現象の中で生じたのであるから，各時代における指導的文化にもとづく共通な世界史の問題の自覚があり，各国はそれぞれの特殊な立場において，それに対応するのでなければ，生存することはできなかった。各時代のそういう現在の問題の自覚の上に初めて，modern の自覚ないしは modernization が生じたというべきであろう。これは云い換へるなら，人間の生存に対する基本的な自覚が基礎となって，世界の諸国民の相互関係の中で，彼等の今日の生存の自覚と明日への彼等の方向づけが，そこには見られた。

3

日本において欧米化が近代以来の日本の近代化として考えられるに至ったのも，日本のおかれた状況の中で理解することができる。これは世界史的に見れば，この時代に西欧及び U.S.A. が指導的役割を演じて来たということと関連する。今日の世界においてはこの状況もすでに変って来たが，modern といえばすべて西欧か U.S.A. に結びつくものと考える俗見も多いので，西欧についてまず考えて見ることが必要であると思う。

modern の意識は，その言葉の意味から見て，いつの時代の現在にもあるはずであるが，西欧において modern の意識の特に高まったのは，16C から 19C に至る文明のあらゆるの部門における発展が行われ，それを巨大な進歩と自認した西欧人の自信によるものであったと私は考える。特に自然科学の進歩による技術の急速な発展が生じ，産業革命は西欧人の生活と軍事力とを驚くべきほど変化発展せしめた。中世に始まった他の大陸への探検はやがて植民地の獲得に推移し，西欧の富は史上空前の繁栄に高められた。この時期に世界を支配したものは西欧であった。

この繁栄の基礎をなしたものとして，近代合理主義の確立をあげなければならぬ。これこそ近代西欧文化の骨格をなすものであった。近代科学は計量的な観察と実験とによる帰納法によって基礎づけられ，現象を理性によって明確に分析し，その本質を抽象把握する客観的精神

に貫かれていた。これによって科学は長足の進歩をとげた。

合理主義は同様にして人間社会にも向けられた。ここでは個人を発見することにより，人間尊重の精神が目醒めた。個人主義と humanism とが生れた。そして自由と平等とは新しい社会の理想となった。社会革命の自覚も生じた。そして市民社会の形成が始まった。

以上あげた事象は中世の社会事象とは甚しく違って見えた。ここには飛躍的進歩による中世との隔絶が実感を以て西欧人には感得されたように見える。この時期に歴史における進歩の観念が強く成立したのも理由のないことではない。これらは modern を強く意識したことから生じた歴史観の大きな特徴であった。例へば 18 C の西欧人がこの時代の高い意義を感ずれば，感ずるほど，この時代の合理主義の運動の起点がどこにあるかを探ろうとしたのは当然であり，modern の精神の発祥をたずねて，この時代の modern の高い価値を確認しようとする機運も盛んとなり，Renaissance や宗教改革にその始源を求めることも生じた。

このことは，云い換へるなら，この現在における最も切実な自覚によって，歴史を解釈したことであり，例へば 18 C をとって見るとすれば，18 C における西欧諸国をその現在の世界史の中に位置づけ，これにより彼等の現在から未来への一定の方向づけを行ったことを意味している。これが 18 C における西欧諸国の modernization であって，この現在における modern の自覚である。modernization とはこういう事実をさす外はない。

したがって modernization とは 18 C の西欧に限ったことではなかったと私は見たい。それは西欧の歴史的展開の各時代の現在にあったはずであるし，また他の諸国民の歴史の各時代の現在にもなければならなかった。個々の国民の歴史のすべての現在においてそれが生じたのは，世界史における複雑な文化交流の中で，絶えず彼等に切実な問題の自覚を抱かせ，未来に向って彼等の生存の方向ずけを行わしめたからである。

その一例として，18 C の西欧を見るとすれば，その modernization は上にのべたような，合理主義を基調とする一定の内容を持つものであった。それはこれ以前のいかなる時代や他の諸国民における文明の発展とも異なり，その深さや規模においても，発展の速度においても，比較にならない位に大きく，且つ急速なものであり，さらに世界史的関連の仕方も広汎で深刻であったことによって，西欧における中世の文明との間にすら越え難い断層があるかのように，彼らには感じられたのである。西欧の文化は当時において，世界文化の主流を占めたという彼らの自覚と他の諸国民によってそれは同様に評価されたこととによって，modern の名称は西欧が独占した形となった。他の諸国にもそれらの modern はあったはずなのに，西欧文明が modern と同義語のように考えられたのは，当時の世界史的状況によるものであった。そして西欧人自身が中世を伝統主義，近代を合理主義と規定して対立させる考え方がここには生じた。もちろん 19 C から 20 C にかけてこの考え方は次第に強い批判の対象となったことを見逃がすことはできない。しかし日本においては西洋史を解釈する場合に，この二つを対立させる考え方が一般に歓迎された。この理由は日本の状況の中にもあったと思はれるが，ここではふれない。

日本においては近代化という言葉は一般に Renaissance 以来の一連の文化運動として解釈されているのは，西欧史におけるこの時期を modern という歴史的個性によって規定する立場から来ているのであって，これはそれ以前の時代の個性と対立させて解釈する時代区分と見ることができる。だから私が上に規定した近代化 (modernization) とは概念が異なる。私の近代化 (modernization) の規定は時代区分の概念ではなく，歴史的展開の上に生起するすべての現在において，人間が持つ切実な問題の自覚をさすのである。一例として16 C 以降の時期をとりあげて見ても，今日まで約 360 年の時の流れがあり，その間の世界史の変化も極めて複雑であって，西欧にとって 18 C と 20 C における問題意識は，それらが近代という時代区分の中において密接な関連はありながらも，全然同じと考えることはできない。時代区分としての近代はその期間が未来に向って小刻みに延長されればされるほど，全体としてはあいまいな概念になって行く。しかし 20 C 後半における近代化 (modernization) は 18 C のそれとはますますちがったものになる可能性がある。

このように見れば近代化 (modernization) とは時代区分の概念ではなく，人間が生きるための現在における問題の自覚を持つことに深くつながると私は考えるのであって，これは次に来る時代を呼び醒まして行くことに大きな意味があるということができる。

西欧近代の合理主義は特徴のあるものであり，また個人主義もそうである。社会は個人と個人との相互作用であると主張する社会学者もあった。近代の特徴を合理主義として，中世の伝統主義と対立させた場合に，個人を

尊重することに最大の目標があるように見えるが，西欧においては，中世のキリスト教会においても，個人は重要な存在であったといってもよいであろう。そこではGodとの関係において重要な存在であった。キリスト教においては，周知のように，唯一絶対者としてのGodへの信仰は，Godと個人との対決によるとのと解され，罪の意識において個人の信仰として成立していた。Godは個人にとって生活の軸であって，彼の属している集団の守護神という性格を全く持っていなかった。ギリシャやローマにおいては集団（家族，村落及び都市）の守護神が存在したが，これもキリスト教への改宗と共にほとんど崩壊した。キリスト教は西欧社会を極めて強く特色づけた。それは個人の信仰として成立したことにその意義をみとめることができる。

これは西欧近代において成立した個人主義の地盤であったと私は見たい。中世にはGodに絶対の権威を認め，個人はこれに向い合ったが，これに従うものとなった。近代においては権威をGodから個人に移そうと試みた。これは十分に成功しなかったが，いく分かは成功したと見ることはできる。これらの事実を見るなら，近代個人主義の成立は西欧の伝統の中で始めて可能になったと見てよいだろう。

伝統はただ古い固定したものだということはない。それは絶えず創造の地盤となり，それ自身も徐々に変化するものであることを理解しないと，これらのことを理解できない。これを理解するためには，通文化的な比較研究の必要なことは明らかである。ここでは便宜上日本との比較を，簡単にして見ようと思う。

日本においては，今日でも個人的信仰が強いとは云えない。歴史的に見ると日本の宗教は，その多くは集団の守護神信仰として成立していた。個人の信仰も全然なかったのではないが，この場合でも，個人は彼の属する集団の守護神（カミガミ——複数）に対する信仰を同時に持っていた。家族，同族，村落，都市，大名領国，統一国家などのすべては，それぞれの守護神を持ち，これらに属する住民は三重にも，四重にもこれらの守護神を同時に信仰した。守護神の祭祀は，極めて概略的に云えば，大小の集団の首長が，集団の各成員を代表して，主要な神事を行う慣習であった。だからそれらの集団の政治構造と密接に関連していた。このことは明治維新における新政府の神社政策に表れたものと密接に関連する。この時政府は，全国の大小の神社を，伊勢神宮をを頂点とする階統組織の中に編入して，新しい政治組織の精神的背景とする政策を実施した。

仏教のように個人の自覚を中心教理とする世界的宗教が日本に受入れられた場合にどのような変化をしたのであろうか。一部の僧侶の間に自覚の宗教としての性格を維持することはできたが，民衆信仰としては日本の守護神信仰の地盤に結びついて，集団の信仰となった。明治維新の折に政策によって分離されるまで，奈良時代以来神社と仏寺とは密接な関係を持つようになったし，中世以後は庶民の個々の家はカミガミと仏（複数）とを守護神としてその内部に祀る慣習が成立した。

1873年にキリスト教禁止令の撤廃により，キリスト教の伝導は日本において自由となった。他の欧米文明が日本人によって極めて強く歓迎されたのに比べると，キリスト教の伝播は甚しく事情がちがい，各会派のキリスト教が受入れられたのに，それらの教会は今日でも，いずれも少い信者しか持つことはできない状況にある。愛を教義とする内容が悪いわけはない。また日本の在来の諸宗教より積極的な社会的救済事業を実行しているのであるから，受入れられないはずはないのに，事実信者の数は甚しく極限されている。この理由を私は的確に指摘することはできないが，Godの観念やそれに対する信者の態度は日本の宗教と著しく異なることに原因があるのではないかと思っている。

欧米における個人主義は合理主義を基調とした。それは欧米においてはpaticulalismからuniversalismへの展開において生じたのであるから，彼等にとって合理主義や個人主義は世界に共通する原理として成立するものと考えたのであろう。しかるに欧米文明の日本への輸入において，合理主義や個人主義はほとんどはいって来なかった。この事実は，日本においては，日本人が封建的・非合理的であって，合理主義や個人主義を理解しないことに理由を求めていることが非常に多い。この理由によって，日本の近代化の内容が低劣であるという評価がインテリの間に有力である。

これに対して第二説を説くアメリカの学者は，日本工業の近代化は日本人の合理性によって有効に処理され，日本の現在の発展を実現しているのであって，日本人が高い合理性を持つことを，日本の歴史に探ることが大切であることを主張している[1]。この説は日本の多くの学者との間に大きな食いちがいを生じている。それ故日本の近代化の問題を明かにするには合理性という言葉の意味を明かにすることも重要である。

---

(1) R, N, Bellah, Tokugawa Relion, 1957. 堀一郎，池田昭共訳「日本近代化と宗教倫理」未来社，1962. 前掲 Abegglen 及び Levine の書著。

これらの学者が使用している場合でも合理性という言葉の意味は十分に明かではないが，日本で一般に用いられている場合には一層あいまいである。合理性とか，合理的とかいわれるものは，非常に高度の文明社会にのみあるように考えられているが，これはむしろ人間に本源的な心の作用であって，それは原始社会にすでに見られた。ある一つの社会にはその環境に適合した合理性がなければ，人間は生存することはできなかった。人間は動物と異なり，工夫し，創作し，発展して来た。そして文化を社会の中に蓄積するために種々の規範を持った。それから生じたものが種々の合理性であった。又合理性があったからこれらのものを作り，新しい環境や条件に対応して生き，生活の発展を生ぜしめたのである。これらの合理性とは価値合理性，目的合理性，機能合理性などと呼ぶものである。

一定の条件において一つの社会が存在すれば，その秩序は一定の価値合理性を持つことによって保たれた。その社会に造られた制度や個人の行動に表れる機能合理性や目的合理性はその社会の価値合理性と複雑にからみ合っていた。このことは未開社会にも文明社会にも存在した。根本的には人間に共通の態度であつたが，それらの合理性の実現の仕方において両者にちがいがあったのは，知識の集積の仕方や人生観や世界観のちがいによるものであり，したがってそれらを自覚することの程度の差異があったからである。宗教や神話もこれらの本源的な合理性の所産であり，合理性の展開と共に変化進展した。それ故人間の生活を可能にしたものは人間に本源的な合理性であったことを知るのは大切であり，人類に様々の発展をもたらしたものもこれである。

私は近代西欧が見出した合理主義はこの本源的な合理性の発展の一つの極限概念であると思っている。これは一面では近代科学を生み，高度な抽象性による理論構造として実現した。その一部は複雑な機械として実現し，高度な技術を人間生活の目的合理性に使用した。それ故近代合理主義は絶えず目的合理的なものとして実現する半面を持っていた。

他の一面では個人主義として表れた。近代個人主義には高度の抽象性があった。自由と平等とはその表れであった。そしてこの上に欧米の新しい社会を構築しようとした。政治も経済もこの目標によって高められはしたが，理想の実現は困難であった。例へば民主主義は政治における代議制度を創り出し，多数の中から代表者を抽出して，全体を表はそうとした。また近代国家はその能率的な目的合理性によって行政組織においても巨大な官僚制機構を造り出した。資本主義経済は大規模な分業組織によって生産を拡大したが，その運営のために，ここでも官僚制機構を成立させた。これらの機構の内部に分業の精密な分化とその統一的統制を造り出したことは，目的合理的な能率主義の発達したことを示すものであって，そこでは個人の全人格的能力から，一面的能力を抽出することによって，組織が可能となったのである。その全体は機械的原理に似た一種の mechanism——言い得べくんば社会的 mechanism——として成立した。これは人間に本源的な目的合理性が近代合理主義によって再編成された一側面を示すものであって，これは西欧社会に生じた新しい価値合理性と強く結びついたものである。組織自体にとっては，それに参加する個人の全人格的能力が必ずしも必要でなかったので，この意味では彼らの関係は impersonal な関係として成立した所に特色があった。その半面では，いわゆる組織人とか人間疎外の現象も生じたのであって，これらを近代個人主義の示す抽象性の一面と称してはおかしいであろうか。

合理主義は人間に本源的な合理性から生じた一つの極限概念であって，それは一見この本源的な合理性を超克したようでありながら，その繋縛から完全に自由ではないということを知るのは大切である。

このように見れば，近代化にとって伝統はいかに大切な地盤であるかを理解することができる。しかし諸国民の文化を形成させた地盤としての伝統が具体的にはいかなるものかを分析することはむずかしい。西欧文化の伝統がどうして成立したかを決定することは，他の諸国民の文化の伝統がどうして成立したかを決定することと共に困難な仕事である。西欧について見ても，それが受けたアフリカ，近東及び東方の文化の夥しい影響を考えないわけには行かない。このように文化の影響を受け得ることは，その内に西欧人の能力の成長の可能性を孕むことでもあった。広い世界文化交流の中で，彼らが各時代の現在に強く生きようとする自覚を持つことによって，彼らの伝統は次第に力強い地盤として確立することができたのであるから，伝統と modernization（近代化）とは離しがたいものであった。

西欧諸国を西欧という一括した言葉でとりあげてよいか疑問である。また欧米という一括した表現についても同様である。ここでは詳細の議論ができないので使用したにすぎない、世界の諸国民の文化の起源が多元か，一元かについて私には答えられないが，現在見る限りでの多種多様をまずみとめ，複雑な世界史的関連の中において，ある程度ちがった歴史と生活とを持つことに注目

し，諸国民の文化が彼らの伝統の上で modernization（近代化）を行って来たことをみとめるのが適当だと思っている。そして伝統も次第に造り替えられるものであると私は考える。

欧米人も他の諸国民も近代（modern age）において modernization（近代化）と云えば，西欧を中心として考えた。これにはそれ相当の根拠はあったが，この事実すら 18C と 20C の後半とでは明らかに状況がちがっていた。18C に西欧が中心となっていた世界は今日すでにない。世界史的条件は今日明らかに変ってしまった。世界全体が共通に持たねばならぬ問題意識は 18C 以来の歴史を踏まえて変ったのであって，それに対する諸国民の個々の立場における問題意識はすなわち今日の modernization（近代化）なのである。

日本について見るなら，かりに明治維新以後に近代化がはじまったという見解をみとめたとしても，明治期に持っていた日本人の問題意識と今日のそれとは同じではない。前者においては当時欧米諸国が示していた帝国主義と資本主義の結びつきによる近代国家の確立が目標であった。しかるに今日においては，民主国家として，世界平和達成の一翼となり，他の諸国と深い連帯関係を結ぶことを目標としている。この二つの目標の間には世界史における日本の立場が深い歴史的関連を以て表れている。これらの目標達成のため，前者においては，欧米文明の習得にまっしぐらに努力した。今日においても外国文明の学習に努力はしているが，明らかに批判的になった。日本における近代化を欧米を中心として考え易かったのは理由はあったとしても，これらを等しく近代化と称した所で，その問題意識には相当のちがいがある。この場合文化の学習や模倣に重要さがあるのではなく，どのような自覚によって外国文化の学習を行ったかということが重要である。そしてこの二つの時期は世界史の展開によって，日本のそれに対応する態度がちがって来たことを示している。日本の近代化(modernization)は，日本歴史のどの時代の現在においても，世界状勢が外部から日本を捉えたと共に，日本が自主的にこれに対応したことによって，引き起されたのである。この期間に日本が創り出した文化を単に模倣と見ることは誤りである。

今日日本では近代化という言葉が余りに流行しすぎてしまったので，今さらどうにもならないという気はするが，私は近代化という言葉より，現代化という言葉を使った方が正しいと思っている。

また多義的なこの言葉をどこにでも使いすぎることはよいことだとは思われない。

(1964年9月13日記)